

1月
2026年

168号

地域共創・未来共創の大学へ

広 報

沖縄大学
OKINAWA UNIVERSITY

発行

沖縄大学入試広報室

〒902-8521 沖縄県那覇市字国場555

☎ 098(832)5557

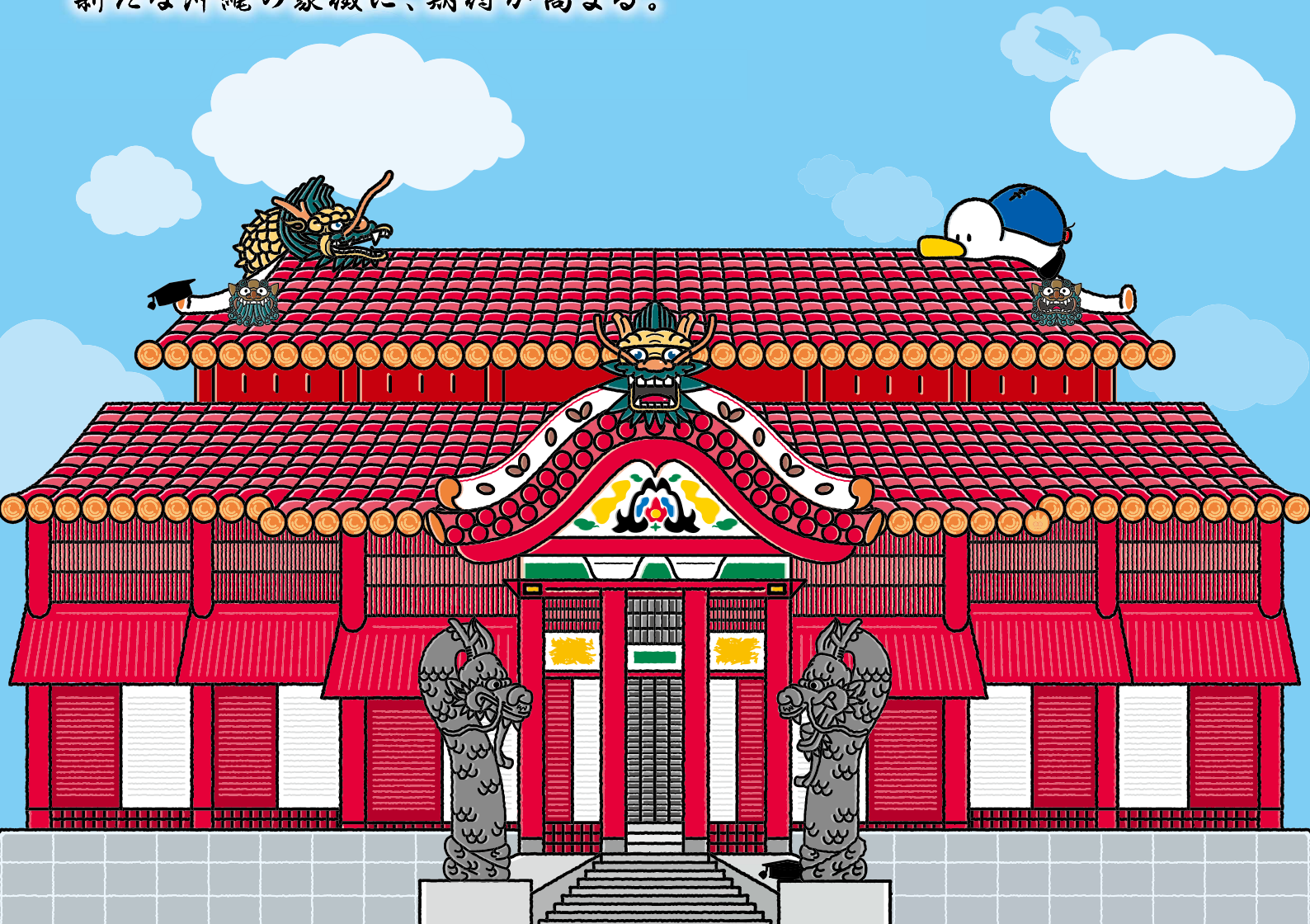
<http://www.okinawa-u.ac.jp>



2026年秋、再建される首里城正殿

あらたな歴史のスタートに！

新たな沖縄の象徴に、期待が高まる。



表紙のイラストは卒業生、KOOTA(画家)の作品です





経法商学科 前田ゼミ(2年)では昨年11月に首里城巡見を行いました。6年ぶりに姿をあらわにした正殿を間近にし、再建される今秋が一層楽しみになりました。今号では再建される首里城の注目ポイントを紹介します。

こちら(地図①)は首里城の第二の坊門(中国式牌楼)である守礼門です。門の上にある「守礼之邦」は、礼儀を大切にす琉球を表し、尚永王代に掲げられました。「守礼」の中国語の発音は「首里(shouli)」と同じなのですが、偶然の一致なのかは分かりません(笑)。ちなみに、第一の坊門の中山門は、守礼門のおよそ500メートルほど手前にありましたが、現在

特別企画！あらたなる一年に！！

首里城に 想いをはせて

2026年秋に完成予定の首里城正殿の屋根が顔を出しました。現在は屋根の一部しか見ることができませんが、それでも完成への期待と喜びで胸がいっぱいになります。県民の悲願でもある首里城完成、今回は経法商学科前田舟子先生のゼミ生(2年)が再建される首里城の見所を紹介します。

また国際コミュニケーション学科末吉綾乃先生のゼミの取り組みについてや福祉文化学科吉川麻衣子先生からは首里城にまつわる沖縄戦のお話についてご寄稿いただきました。



はありません。守礼門の朱色は、平成復元時の色でもありますので、令和の朱色との比較をすると良いかもしれません。

こちら(地図②)は首里城の第一門(正門)である歓会門です。ウチナーグチで「あまへ御門」と呼ばれました。「あまへ」は「喜び」の意味で、歓会はその中国語訳だそうです。首里城にはあちこちに中国語があつて面白いです。

歓会門は守礼門より早くに建てられました。左右には大きな石獅子があるのですが、この日は修復中で見ることができませんでした。



こちら(地図③)は、首里城の第二門である瑞泉門です。「瑞泉」の名前の通り、右側には瑞々しい泉が湧き出ています。水を出

す龍桶は、中国産青石できています。龍桶の左右には縦横に四文字の漢字が刻まれた石碑が並べられています。その一つに「中山第一」と刻まれた石碑があります。これは、康熙58(1719)年に来琉した清朝の冊封使徐葆光によるもので、「中山(琉球)で一番おいしい水」という意味です。泡盛の「瑞泉」は、この瑞泉が由来となっているそうです。





こちら(地図④)は首里城正殿への最後の門となる奉神門です。別名を君誇御門きみほごみかどといわれています。創建年は不明ですが、1562年秋には石造欄干が完成しています。その欄干に乗るのが、小さな石獅子です。写真の石獅子の左



今回の火災で焼け落ちてしまった大きな龍の頭は「龍頭棟飾り」と言い、実寸の横幅は3.4メートルもあります(上の写真)。その下に飾られる

足下には毬があります。奉神門は1709年に一度焼失しましたが、その3年後には再建されました。2019年の火災では焼失を免れましたが、延焼の影響で一部が黒く焼け焦げていました。ここで、首里城を代表する巨大な2つの龍を紹介します。首里城では、石や木の彫刻のほか、焼き物や絵など、さまざまな形の龍を見ることができ、龍は中国古代の神話に登場する架空の動物で、中国の紫禁城にも描かれています。中国皇帝を象徴する龍の爪は五本ですが、琉球は中国皇帝への尊敬と配慮から四本爪となつています。



鬼瓦は、名前こそ「鬼」ですが、実際は獅子です(下の写真)。この鬼瓦は、沖縄大学出身の新垣優人さんが製作しました。私たちの先輩が首里城の製作に携わっていると聞いて、とても誇らしく感じました。みなさんもぜひ首里城に足を運んで、完成前の「今」の首里城と、完成後の首里城を比較してみてください。平成と令和では下



の写真的扁額のように、大きく変わったところもあります。日々進化を遂げる首里城を観察するのもとても面白いです。(終)



▲ 平成復元時の康熙帝の扁額は朱色



▲ 令和復元時の康熙帝の扁額は黄色

参考資料：首里城研究グループ編『首里城入門 その建築と歴史』ひるぎ社、1992年(1989年初版)

引用写真：「沖縄タイムスプラス」Web版、2025年10月31日、「平成復元時は朱色塗だった扁額「中山世土」、地板を黄色塗に」、<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/1703583>

首里マップに 関して

さあ、いよいよ首里城が完成します。

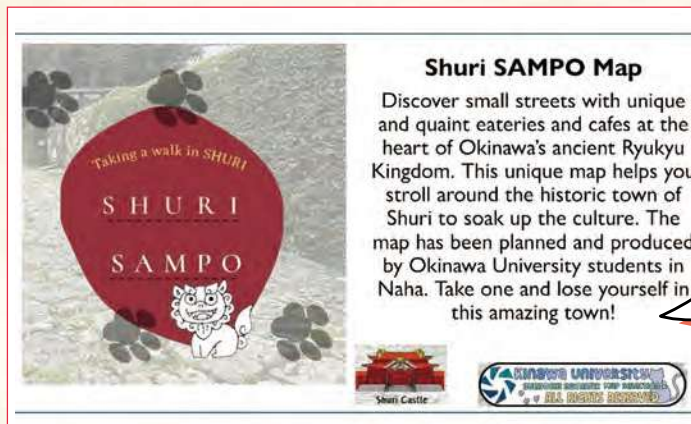
首里といえば、琉球王国の歴史と政治の中心として知られていますが、かつての首里は、人々が行き交い、マーケットや市がにぎわう城下町そのものでした。

首里城は、この街の暮らしや文化とともにあり、周辺を歩いてはじめて、その本当の姿と魅力が見えてきます。古の首里の街歩きを楽しめるのが、末吉ゼミの学生が制作した「Shuri Sampo Map」です。学生はマップ制作を通して、地域の方々が大切にしてきた「首里を城下町として甦らせた」という想いにも触れました。

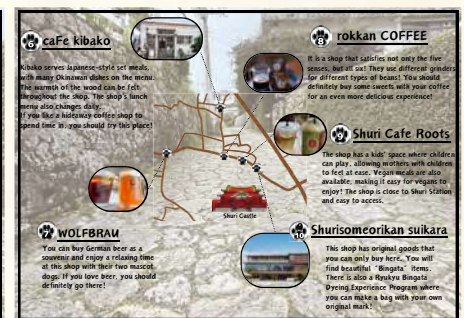
この歴史ある街には、魅力的なカフェやショップ、琉球の歴史や文化にゆかりのあるお店、拝所が点在しています。首里城だけを見学して帰るのは、少しもったいない——。

城と街が一体となった古都首里の空気の中で、ゆつくりと迷子になる時間を楽しんでみてください。

国際コミュニケーション学科 末吉綾乃



マップは末吉ゼミが制作したWebサイト「OKINAWA A C C H E R I N N A H A」で見ることができます！



焦土からの再生と不屈の心—首里城と歩んだ、ある体験者の戦後

沖縄戦を生き抜いた人びとの「語り合いの場」が、今年で20年目を迎えました。この長い対話の中で、首里城は幾度となく話題に上りました。

忘れられない語りがあります。ある参加者の男性は、当時15歳の少年として、米軍の凄まじい艦砲射撃が首里の丘を襲う光景を目の当たりにしました。「燃え上がる城を見て、世の終わりだと思った」。彼が語った深い絶望は、琉球の誇りと日常が音を立てて崩れ去る、決定的な喪失の記憶でした。

戦後、焼け野原となった首里城跡には琉球大学が建設され、彼はそのキャンパスで職員として働くことになります。かつて「日本軍司令部」が置かれ、徹底的に破壊されたその場所で、今度は未来を担う学生たちのために汗を流す日々。瓦礫が散らばる道を歩き、物資不足の混乱期を必死に生き抜いた彼の姿は、焦土から立ち上がろうとした沖縄の人びとの歴史そのものでした。

やがて朱色の城郭が美しく復元された時、それは沖縄戦体験者にとって、歩んできた苦難の道が報われた「再生」の証でもありました。だからこそ、2019年の火災で再び城が失われた際も、深い悲しみの中に力強い言葉があったのです。「また建て直せばいい。私たちはゼロからここまで生きてきたのだから」。

首里城を語ることは、美しき王都の記憶と戦火による痛恨、そして戦後の復興を支えた不屈の魂、その全てに向き合うことです。彼らの言葉からは、何度も焼失し、その度に蘇る首里城のように、決して折れることのない「ウチナーンチュの心」が、静かに、しかし熱く伝わってくるのです。

福祉文化学科 吉川 麻衣子



第66回沖大祭が11月1日と2日に開催され、多くの学生や教職員、そして来学いただいた皆様の協力のおかげで盛大に幕を閉じました。ステージイベントだけではなく、今年は出店ブースも多く、ゼミやサークルのメンバーで工夫を凝らしたゲームコーナーやワールドワイドな飲食ブースが学園祭を盛り上げました。

第66回 沖大祭

笑顔あふれる2日間
盛大に幕ノ間



沖大祭を終えて

沖大祭実行委員長

経法商学部・経法商学科
3年 宮里 優希

11月1日・2日に開催された第66回沖大祭は、両日とも素晴らしい天候に恵まれ、多くの来場者の皆さまにお越しいただき、無事に全日程を終了することができました。

沖大祭は、実行委員

を中心に学生が主体となつて企画・運営する学園祭です。私は大学1年のときに、友人に誘われたことをきっかけに本委員会へ所属し、今年で3年目を迎えます。参加当初は先輩方に頼ることが多く、自身の役割も明確ではありませんでしたが、現在では主要メンバーとして責任を持つて取り組めるようになつたと実感しております。

今年度の沖大祭は例年に比べ、学生の参加率が高く、多彩な出店やイベントが行われました。学生・来場者ともに楽しんでる姿が見られ、大変嬉しく感じています。

今年度も沖大祭を成功に終えることができました。これは、実行委員をはじめ、学生・教職員の皆さま、そして関係業者やステージ出演者の方々など、多くのご支援とご協力のおかげです。今回挙げられた反省点を踏まえ、次年度の改善につなげてまいります。

来年度開催予定の「第67回沖大祭」でも、皆さまのご来場を心よりお待ちしております。





沖縄県教員採用試験合格者

教員採用試験 —過去最多— 現役合格36名!

沖縄県公立学校教員候補者選考試験最終合格者について、本学からは現役で35名(小学校34名・中学保体1名)が合格しました。現役合格者数は過去最多となっています。また福岡市の教員採用試験にこども文化学科の学生が1名合格していて、あわせると36名の現役合格者となりました。

また過卒生も多く卒業生から合格の連絡も受けています。難関といわ

れている中学校保健体育合格者16名のうち4名が本学生・卒業生という結果です。沖縄大学の教職課程は3年次からの教員採用試験対策だけでなく、1年次からの学校現場での実習科目やインターシップといったカリキュラム履修を経て、4年間で確実に実践力を身に付け社会に送り出す、「沖大ブランド」を画一してきています。



こども文化学科
4年次

豊里 楓貴

教員採用試験を終えて

教員採用試験を振り返ると、この一年間は自分自身と向き合い、仲間と支え合いながら歩んだ非常に濃い時間だったと感じます。一次試験

は、自分の力が問われる場であり、個人で努力を積み重ねる必要があります。3年生の10月からは毎週土曜日の土曜講座に参加し、朝から学習する習慣をつけることを心がけました。先輩方から「まずは基礎固めが大事」と助言をいただいていたため、数学や理科を中心に基礎の見直しから始めました。しかし、思うように点数が伸びず、勉強方法にも悩み続ける日々が続きました。学校に毎日通うことが私にとって負担でもあったため、週2回は学校で

友達と情報交換を行い、その他の日は場所を変えながら気持ちを切り替えて学習するなど、自分なりのペースで前向きに取り組む工夫をしました。どんなに点数が低くても、「絶対に合格する」という言葉を仲間と声に出し、お互いを励まし合えたことが、最後まで頑張りぬく力に繋がったと思います。

二次試験対策は、一次試験の一週間後から本格的に始めました。毎日学校へ通い、宮里晋先生をはじめ4名の先生方から指導をいただきました。最初は内容すべてが手探りの状態で不安も大きかったのですが、先生方や先輩からの丁寧な助言、仲間との意見交換を通して少しずつ理解が深まり、自信を持って試験に臨めるようになりました。

また、4年間の大学生活で培った経験も大きな力となりました。沖縄大学では2年次から模擬授業の機会が多く、「学校ごっこ」や「沖大小中」

など、実際の子どもの前に授業を行う体験が豊富にありました。これらの活動は授業づくりの力を育てるだけでなく、子どもと関わる難しさや楽しさを実感できる貴重な機会でした。さらに、年3回の学生主体の学科行事では、学年を超えた交流が活発で、先輩から学んだことを後輩に受け継ぐという文化が自然と築かれています。この4年間で、多くの人と関わり、多様な経験を積むことができたことに、大きな感謝と誇りを感じています。

今回の採用試験では、支えてくれた先生方や先輩、そして共に励まし合った仲間の存在が合格に欠かせないものであったと強く実感しました。とくにこの一年間は、教育や子どもとの関わり方について深く考える時間が増え、教員という仕事の奥深さを改めて感じるとともに、自分がどんな教師になりたいのかを見つめ直す機会にもなりました。これから現場に立つ

身として、今後も学ぶ姿勢を忘れず、試行錯誤を繰り返しながら、子どもたちに寄り添える素敵な教師になれるよう努力していきたいです。



福祉文化学科
4年次
比嘉 星斗

超難関の教員採用試験
(保健体育) 現役合格！

教員を志望したきっかけについて

中学校時代、少しヤンチャな友人とも仲良くしていて、いろいろな面倒をみていたことから、担任の先生に、「教員にむいていると思うよ」と声をかけてもらったことがきっかけです。そこからは、教師になる夢を叶えるために、がんばってきました。体育の先生を夢見て、大学受験では名桜大学にチャレンジしましたがうまくいかず、最後の試

験で沖縄大学にどうにか合格できました。沖縄大学に進み、1年次から地域の中学校でボランティア活動をし、4年間現場にかかわることができ、実践を積むことができたことが合格という結果に結びついたのではないかと思っています。今では沖縄大学に進んでよかったと心から思っています。ゼミの嘉数健悟先生にはとてもお世話になりました。勉強面でのアドバイスはもちろんですが、相談にも丁寧につけてくれて、学校現場に知り合いも多いい先生なので、頼もしくも感じていました。沖縄大学での出会いや学びはとても大きいものでした。

試験勉強について

3年の9月から本格的に勉強をスタートさせました。大学推薦枠で受験できたので、専門科目にしばって勉強できたのは良かったです。過去問題を繰り返し解きました。うまく勉強が進まず、モ

チベーションが下がったときは、「教師以外の職は自分にはありえない」と自分の夢を再確認し、同じ学科で教員採用試験を受ける仲間と支えあいながら頑張りました。2次対策では卒業した先輩たちと一緒に模擬授業や面接指導にと励み、今回保健体育の教員採用試験においては、沖縄大学から4人が合格できたことは、とても嬉しく感じています。

どんな先生になりたいですか

生徒に寄り添うことができる先生になりたいです。沖縄の抱えるこどもの貧困問題や不登校といった普通とは違った子どもたちのために、いまから自分になにができるか考え、そして行動していきたいです。沖縄のこどもたちは支えあえる力、助け合う精神は他道府県と比べるとあるのではないかと感じているので、長所をいかし、沖縄のこどもたちの未来が明るいものになることを願います。

先輩にアドバイス

教員採用試験は自分との闘いかもしれません。モチベーションを維持して、後輩たちには頑張つてほしいです。そして4年間はあつという間です。忙しくて大変なこともありましたが、「楽しかったー」っていまは、思っています。沖縄大学の健康スポーツ福祉専攻は、先生や仲間と相談しやすい環境があり、そこが魅力です！

沖大教職の使命

教職支援センター事務長

上原 将司

ここ数年、教員採用試験界限の動きに注目していると、まさに変革期だといえるのではないのでしょうか。採用試験の日程が全国的に早まり、沖縄県では大学4年の6月に一次試験を行っています。過去に比べると一か月以上も前倒しとなっています。その背景には、教員の人材不足・優秀な学生

の確保などがあるようです。

沖大の教職課程では採用試験対策講座も行っているのですが、年々早まる採用試験に呼応するように、より早い時期からの対策講座を設定し対応をしています。教員になりたいという学生の目標達成のために、教職関係の大学教員、教職支援センター、そして学生本人の努力、三位一体となつて学生の「夢実現」への道を切り開いています。

県内の教育現場には、積年の努力の甲斐あつて本学出身の先生が増えてきています。地域に根ざした大学として、地域の教育環境に微力ながらも貢献できているであろうことは、とても喜ばしく感じます。教職課程カリキュラムで理論と実践を学びつつ、採用試験対策で座学を鍛え、多くの学生が卒業後には夢だった教壇に立つ、そんな沖大教職を目指していきます。地域の教育を支える教師を養成していくこと、それが沖縄大学教職の使命だと思います。

沖大の魅力に迫る vol.14 沖大散策

沖縄大学キャンパスにある貴重な美術品等について紹介する企画、沖大散策。今回は学内にある画期的な施設についてご紹介します。

みなさんは2号館の理科実験室入口近くにある浄化槽施設をご存じでしょうか。そして2号館と3号館のトイレでその水を再利用できる設備があることを。これは環境学者・公害問題研究家であり本学の名誉教授でもある宇井純先生(1932年6月25日 - 2006年11月11日)が設計したものです。宇井先生のゼミ生であった経営企画室室長の後藤哲志さんに寄稿してもらいました。

沖縄島中南部が北部に降った雨を調達する広域的な水供給を「北水南調」と表現したのは、環境学、途上国環境問題が専門の桜井国俊名誉教授だった。

昨年11月、北部のダムにつながる導水管が損傷し、中南部の市町村では断水に備えるよう大々的に節水が呼びかけられるということがあった。いろいろな分野で持続可能性が問われて久しいが、遠くの誰かが敷いたレールに乗っかっていると、自分ではあるいは身近な地域では管理できない事象にオロオロとさせられてしまうことがある。今回の断水騒動もその一例だろう。

「それは持ちますか」という問いかけは、桜井国俊先生の師であった名誉教授第一号の故宇井純先生の判断尺度である。東京大学の都市工学科で教えただけでなく、市民ともな学学習をしようと夜間の自主講座「公害原論」を長年開講した宇井純先生はその実力ゆえに「夜の東大総長」とも言われ、公害企業や御用学者から恐れられたという。大学の体制だけでなく立身出世のために学ぶ学生にも嫌気がさしたという宇井純先生は1986年に「さらば東大」という連載コラムを朝日ジャーナルに4回書いて沖縄大学に赴任した。

桜井国俊先生は、学生時代の思い出をこのように話している。「私は宇井先生が教えることになった最初の年の学生ですので、ある意味宇井



▲浄化槽に立つ故宇井純先生
『OKINAWA UNIVERSITY COLLEGE GUIDE 2002』より

先生の最初の弟子の一人ということになると思っんですね。大変厳しく鍛えられました。そして私は本当に宇井先生には実力があるということがわかったんですね。その後中西準子先生が来られ、宇井・中西というこの二人の助手に徹底的に鍛えられたんです。私はそこで少しづつ世の中おかしな人じゃないかと思うようになってきたんですね。世の中というのは、まず直近の所は東京大学でございます。この二人は抜群に実力があることがわかる。でもその実力は大学の中で正當に評価されていないということを感じたんですね。」(桜井国俊「最終講義 沖大14年、そして未来へ」『沖縄大学広報』133号・134号、2014)

宇井純先生は沖縄大学で16年過ごし、2003年に沖縄を去るとき

にも連載コラムを新聞に10回書いた。沖縄が生き延びるための十の遺言のような内容である。その第8回のタイトルが「それは持ちますか」であった。冒頭を引用する。「このところ、この島で生起し、あるいは遭遇するいろいろな動きに対して、私が判断する第一の尺度は『それは持ちますか』つまり持続できるかどうかでこちらの考えを決めることにしている。この小さくてデリケートな島が果たして生き残れるか、米軍基地を引き受けることで中央から降ってくるいろいろな開発事業をこの問いで判断したら果たしてどれだけの意味のあるものとして残るだろうか。(中略)沖縄が今本当に必要なとする研究は環境とか軍縮のように皆複合領域で社会科学を含む。」(宇井純「格闘16年 島が溶けてなくなるぞ」『沖縄タイムス』2003年5月28日)

宇井純先生の専門の一つは使った水をきれいにする下水処理であった。化学者として最初に水俣病を告発した人である。そして50か国を超える公害の現場を歩いた上で沖縄に身を置く必要性を感じ、沖縄で自身の技術を現したのが2・3号館のトイレで活用する中水設備であった。この設備は私が沖縄大学に入学した1989年に稼働した。以下、宇井ゼミを履修した私の責任において、この壮大な設備についてこの場を借りて説明を試みる。

この中水設備はとてもシンプルでスモールでノーマルな素材でできていて、自前のメンテナンスでタフに働いてくれる。つまり、設置も運転も維持管理も常識程度(世界の常識、日本の非常識の費用で完結してしまつたためビジネスの対象にはならない。

本来、トイレで使用する水に期待されているのは汚物を流す役割であり、運搬手段にすぎない。汚物を流すという仕事のために、遠くのダムから引っ張ってきた飲み水である上水を使うのは、チェーンソーで豆腐を切るようなものだ。雨水で十分に役割を果たすことができる。

2号館の屋上は200トンの雨水を溜めることができる。もともと濁水に苦しめられてきた沖縄では、家々で貴重な雨水を溜める工夫がされてきた。農地でも溜池を共有し管理をした。カーもしかり。今でもそのような情景を目にすることはできるが、コンクリートジャングルの市街地では雨が降ってもみすみす排水溝に逃してしまっている。中南部では恵みの雨を捨ててしまい、北部に降った雨をダムに溜めて調達する。しかし、ダムには弊害もある。一つだけ挙げると、川の流量が減り海に出ていく水の勢いがないので海から打ち寄せる砂が河口に溜まってしまふ。川から海へ流失する赤土(そのこと自体が大問題だが)も溜まってしまふ。やんばるでは多くの河口が土砂で閉塞し、川を通じた海と森とのやり取りが細々しくなってしまう。図書館で『森は海の恋人』『川は、訴える』などを手にしてみてもいい。

さて、沖縄大学は北部に負担をかけまいと、幸いにも沖縄大学に降った雨はできるだけ溜められている。その雨水をトイレで罪悪感なく使い切ってしまったら、次は中水

である。トイレの下水を捨ててしま
うのではなく、近場できれいにした
処理水を中水として使い回せばよ
い。なにも、飲み水のレベルまでき
れいにする必要はない。下水を衛生
的にきれいにする装置が浄化槽で
ある。一般に普及している浄化槽や
下水処理場では、下水に空気を入れ
る槽と入れない槽を繋げているが、
宇井純先生の設計した浄化槽は一
つの槽で空気を入れたり止めたり
するのがミソで、そうこうしながら
菌や微生物の力を借りて下水から
汚れ(細菌や微生物の栄養分)を取
り除くことができる。すなわち浄化
をしている。この下水処理の過程を
一言で表すと「無機窒素化合物の生
成→脱窒」となる。これは、2022
年共通テスト理科①生物基礎第3
問B問4の正解である。

以上の仕組みが2・3号館の中水
設備である。繰り返すと、建物の屋
上や地下に雨水を溜め、まずはこ
の雨水をトイレで使用している(手
洗い用の蛇口からは上水が出る)。
そして、雨水を使い切るとトイレの
下水を2号館理科室手前の浄化槽
で脱窒し殺菌処理した中水の出番
となる。この中水は、使い回してい
るうちにビリルピンという胆汁色
素が少しずつ濃くなってくるので、
茶色がかつてくると、最近雨が降っ
てないのだな、農家は苦労してい
るだろうか、などとトイレで俗世に思
いを馳せることになる。

身近な範囲の水の循環を自分た
ちの力量でやってみようという中
水設備である。これがお金の少ない
沖縄大学で実現すれば、水の足り
ない国々、不衛生な水で乳幼児が死

んでいく国々、ダムや下水処理場を
作る金のない国々、つまり世界の多
数の人々の役に立つはずだ、とい
う想いがこの中水設備には込めら
れている。ちなみに、沖縄の亜熱帯
の環境条件は多くの途上国の環境
に通じており、沖縄は世界の大部分
の人が必要としている技術を開発
するのに適している。沖縄で実証す
る持続可能な技術には大きな可能
性があるというわけだ。

宇井純先生は実践的な技術思想
家でもあった。持続可能性の議論が
いつから始まったのか詳細を知らな
いが、『成長の限界』が出版された
1972年には、地球は有限であり
人類は100年以内に危機的な状
況を迎えることになるのではない
か、と警鐘が鳴らされている。72年
といえば沖縄が「復帰」した年だが、
国際社会ではストックホルムで国際
人間環境会議が開かれ、「人類」と
か「地球規模」という考え方が広ま
る嚆矢となった。宇井純先生も水俣
病患者と共に参加をしている。そし
てその翌年の73年に経済学者シュ
ーマツハラの『スモールイズビユー
ティフル』が世に出、たちまち世界
的ベストセラーとなる。宇井純先生
はこの本を沖大生の必読書とした。
こんなことが書かれている。「ガン
ジーが語ったように、世界中の貧し
い人々を救うのは、大量生産では
なく、大衆による生産である。(中
略)大衆による生産においては、誰
もがもっている尊い資源、すなわち
よく働く頭と器用な手が活用され、
これを第一級の道具が助ける。大量
生産の技術は、本質的に暴力的で、
生態系を破壊し、再生不能資源を

浪費し、人間性を蝕む。大衆による
生産の技術は、現代の知識、経験の
最良のものを活用し、分散化を促進
し、エコロジーの法則にそむかず、希
少な資源を乱費せず、人間を機械に
奉仕させるのではなく、人間に役立
つように作られている。私はこれに
中間技術という名前をつけたが、そ
れはこの技術が、過去の幼稚な技術
よりずっと優れたものではあるが、
豊かな国の巨大技術と比べると、遙
かに素朴で安く、しかも制約が少な
い性格を言い現している。自立の技
術、民主的技術ないしは民衆の技
術と呼んでもよい。要するに、誰も
が使え、金持ちや権力者のためだけ
の技術ではないのである。」(E・F・
シューマツハラ『スモールイズビユー
ティフル』人間中心の経済学) 講談
社学術文庫、1996)

ちなみに、この『スモールイズ
ビユーティフル』が世界で出版され
た73年に、高度経済成長まつしぐら
の日本では「新全国総合開発計画」
という、それを追いかける沖縄では
「第1次沖縄振興開発計画」とい
うレベルが敷かれる中で、名護市は
市の総合計画に「逆格差論」とい
うの誇りと自立心がコンサルタン
トの力を得て成された論であった。
そして若手の彼らと宇井純先生に
は「復帰」の前から交流があった。

シューマツハラの中間技術は「適
正技術」とも言われるが、宇井純先
生は「柔らかな技術」と言った。そ
してつまるところ「金か暇か」どち
らを選択するのか、と言った。金を使
ってダムや下水処理場に水を委
ねてしまうことができた日本、そ

して沖縄。しかし、それができる時
と場所は限られている。一方で、柔
らかい技術には時間と手間がかか
る。人任せにせず、多少の世話は一
要になるし、そのためには私たちも
もう少し物事の整理がわかるよう
な学ばなければならない。飛躍する
が、これにはどこで暮らし、どこで
どのように働くかということに関
係するし、自分が生活する地域に
どのように関わるか、ということに
も繋がってくる。ただ、そこまで原
理的に実践できるのはコモンズの
実践者か名誉教授の加藤彰彦先生
で、宇井純先生も分散型の水循環
を普及させることについては通信
網を使って数名の技術者が一括管
理すればよしと考えた。実際、沖縄
大学の浄化槽内の状況は電気信号
を使って隣の実験室で把握するこ
とができ、「用を足す学生が減った
ようだから、微生物の王サを入れる
ぞ」と、ゼミで作った廃油石鹸を浄
化槽に投入したりさせられた。

89年に稼働したこの設備が安定
してきたころ、宇井純先生は「現段
階の結論」として次のように書き
ている。「過去20数年の体験から、
水処理はこれまで考えられてきた
ような、複雑高価な技術ではなく、
水の特性を理解すれば極めて簡単
で、安定した技術であることがわ
かる。排水の発生源での処理は、水
資源の保全、再利用、節約のために
重要であることが明らかである。沖
縄のように、水の供給が不安定で、
常にその不足に悩む地域では、その
地域の条件に応じた技術の開発を
行わなければならない。そのために
この経験が役立てば幸いである。」

(宇井純「半回分式活性汚泥法に
よる有機排水処理と処理水の再利
用」『地域研究所年報』No.3、沖縄
大学地域研究所、1991)

水をモデルに中間技術、適正技
術、柔らかな技術を地の利を得たこ
の沖縄で形にしたのが小規模分散
型仕様の沖縄大学の中水設備だっ
た。かつては授業の教材に使われ
ていたし、途上国の役人や技術者な
どがJICAの研修で視察に訪れ
宇井純先生が解説をした。沖縄で
は畜産農家が排水を川に流すのを
やめ、沖縄大学の浄化槽をモデルに
自前で浄化槽を作った事例がある。
浄化した処理水を畑にまいたら作
物の収穫時期が早まった。

宇井純先生は「工業の農業化な
んだ」と言うことがあった。工業的
な生産活動から排出されたものを
処理し、農業で活用するというこ
とだろうか。水銀を含んだ工場排
水は水俣湾の生き物と人々を汚染
してしまつた。技術者としての悔恨
から、使った先の廻らせ方のあり様
を言っているような気もするが、ま
だ真意はわからない。

浄化槽の手前に小さな池があ
る。この池に「魚池」という名前が
付いていることは、いまでは私しか
知らないだろう。ウナギが好きだ
つた宇井純先生は、処理水でウナギ
を育てたいと考えていた。さすが
にこの小さな池にウナギを投入す
ることはなかったが、何種類かの魚
が泳いでいて、沖大の処理水はき
れいだと言った。この円形の小さな
池が先生の言う「工業の農業化」を
象徴しているとすれば、これこそ
沖縄大学のお宝であろう。

管理栄養学科4年
平良 穂乃花 さん

喜屋武 ゆりか 先生

第7回 わたしの先生、 紹介します！

今回は管理栄養学科喜屋武ゆりか先生について、ゼミ生の平良穂乃花さん(管理栄養学科4年)が紹介してくれます。喜屋武先生は「学校給食」、「栄養教諭」、「食育」を専門に研究されています。また学内でミニ菜園作ったりと、食をあらゆる角度から探求されている喜屋武先生の魅力に迫ります。

Q1 喜屋武先生が学校給食の研究を始めたきっかけは何ですか？

A1 私自身が大学生の頃の臨地実習にて、学校給食センターに行ったことがきっかけです。食育基本法が制定され、栄養教諭制度が始まったばかりの時期で、栄養教諭の先生が大変忙しくも充実した様子が魅力的に感じました。そして、学校給食での衛生管理・栄養管理が奥深く、もっと社会に発信し、評価されるべきだと思ったため、学校給食の研究を始めました。

Q2 今取り組んでいる研究テーマを、学生にも分かりやすく教えてください！

A2 学校給食に関する研究をしていて、現在は、「喫食時間を5分延ばすと、残食量がどう変わるか(食品ロス)」という研究をしています。中学校の給食時間はたった15分しかありません。給食時間を5分延ばすことで、ご飯と汁物の残食が有意に減少しました(特に女子で)。完食指導が難しくなっている中、食品ロスを減らすための時間延長の有効性を明らかにすることができました。政策へ後押しするエビデンスを示すことができましたと思っています。現在、国際誌に投稿準備中です。その他には沖縄県に貢献したいという思いから「子どもの貧困と食生活や健康に関する研究」をしています。高校生の食習慣と経済状況の



関連、祖父母のUターンと孫の肥満との関連など、沖縄の実態に基づいて分析しています。沖縄県子ども調査にも携わっています。研究者として、科学的エビデンスに基づき社会的支援や実装へとつなげることを目指しています。社会経済環境の厳しい沖縄県の研究者として、すべての子どもたちが置かれた環境に左右されることなく、その能力を最大限に発揮できる社会の実現に向け、データを分析し発信しています。調理学関連の研究も行っています。

Q3 研究を通して一番嬉しかったことはありますか？

A3 大学院からやっていった食物アレルギーの研究が学会奨励賞を受賞したときが嬉しかったです。当時、手探りでやっていた研究が社会に認められた気がしてとても嬉しかったです！そして、投稿論文が受理された瞬間も嬉しいです。査読の過程で心が折れそうになりますが、乗り越え、アクセプトされた時は歓喜！

Q4 研究や授業で、学生に特に身につけてほしい力は何ですか？

A4 今の社会に求められている表現力や協働力、行動力を身につけてほしいと考えています。

Q5 喜屋武先生が授業で大切にしていることを教えてください。

A5 いろんな経験ができるように心がけています。学生でも様々なことに挑戦できますし、どんなことでも向き合いつづければ乗り越えていけると思っています。しかし、環境や機会には差があるので大学の授業を通していろんな経験ができるように心がけています。学生にとっては大変なことも多いと思いますが、失敗も成功も含めて大学でさまざまな経験を積み、社会へ羽ばたいてほしいと願っています。

Q6 ゼミで印象に残っているエピソードはありますか？

A6 学生約11名とのゼミ旅行で、みんなで同じ部屋で寝たこと(寝れなかった笑)。他には、アネックスでスポーツ大会をした時、小雨が降ってきて濡れながらスポーツ大会をしたことです。12月にゼミ旅行で台湾に行くのでそれが楽しみ(´▽`)美味いものたくさん食べたい！

Q7 学生が研究テーマを決めるとき、どんな視点を大切にしていますか？

A7 「新規性・社会的意義」と「自分の興味のあることや熱意を注げる内容」などに視点をおいてみてほしいです。

Q8 今後、ゼミ生と一緒に今後取り組んでみたいプロジェクトはありますか？

A8 「離島の地域格差」について

今後研究したいと考えています。特に、離島の食環境、流通の特性(船便の影響など)、離島勤務の栄養士業務の特徴(食材費管理、発注・納品業務など)などをゼミ生と調べてみたいのです。学生が離島の暮らしに興味を持ち、いかそこで働いたり、何らかの形で地域貢献につながっていけば嬉しいという思いもあります。

Q9 休みの日はなにをしていますか？

A9 娘と公園にいたり、夏はよく海にいつて泳いだりしています！連休があれば家族でキャンプにいきます。前は、伊是名にいきました！長期休暇は海外に行くのが好きで、一番遠いところで、娘と2人でブラジルにいきました。ワンオペ36時間フライト。1ヶ月半滞在しました。アマゾンの近く(マナウスのアサイーボウルが美味しくて忘れられません)。他の国だと、スペインとタイが好きです！料理が美味しい。



卒業生の活躍を紹介！

あの人はいま



新見 弘基さん

2021年3月 沖縄大学卒業
2021年4月 地元(東京)で営業職に。その後、サッカースクールの運営やコーチとして働く。
2024年4月 石垣市役所 地域おこし協力隊、サッカーコーチ

◎ 現在のお仕事は

石垣島でスポーツコミッションの仕事をしていて、スポーツイベントの開催や合宿の誘致、そしてスポーツで街おこしを目標に地域課題の解決を試みる仕事をしています。初年度は(2024年度)「アルバイト×合宿」事業を手掛け、大学の合宿を受け入れ、合宿中の学生たちには石垣島でアルバイトをしてもらい合宿費用の一部にあてることができる、地域には若い働き手の労働力を生む、合宿にきたい人とアルバイトに来てほしい人、そして地域課題を改善しながら地域貢献もできるという仕組みづくりを行いました。その活動が注目され全国ニュースで取り上げられ、2月にはスポーツ庁で表彰を受けました。今年度はAIを利用した遠隔指導の導入をはじめています。石垣市内のスポーツ施設にはAIカメラを設置して撮影と編集ができる画期的なシステムを導入、プロスポーツに負けないほどの配信が可能となっています。そこで、こどもたちのサッカーの試合動画を元日本代表選手に見てもらい、遠隔でフィードバックをいただくようなシステムづくりの構築を目指していて、その事業については9月に大阪万博の会場で、カメラ開発会社(NTT Sportict)と指導いただく元日本代表の大津祐樹さんとトークセッションを行いました。わたしはサッカー部の外部コーチもしていますが、指導者不足という石垣島の課題解決にもつながる取り組みになるのではないかと期待しています。

◎ 沖縄大学に進学した理由について

高校時代はサッカーに没頭していた、卒業後は海外で挑戦したいと思った時期もありましたが、高校3年になり、親に大学は卒業するようにといわれ、そこから大学について調べました。大学生活を送るには、北海道か沖縄がよいのではないかと考え、簡単に帰ることができる沖縄を選び、将来はスポーツに関わる仕事につけたらという想いがあったのでスポーツについて学べる沖縄大学に進学を決めました。大学4年間があったからこそ今の自分があると思っています。一人暮らしの生活や大学での学び、部活動を通して生きる力が養えた、自分に自信がもてた、そんな大学時代でした。沖縄大学が大好きで、お世話になった先生や仲間、部活の監督方への感謝の気持ちから、沖縄に恩返ししたいという想いになり、今につながっています。

卒業後は東京で最先端を学び、いずれ沖縄に戻りたいと思って、東京で就職(営業職)しましたが、ちょうど新型コロナウイルスの影響もあり、思い描いた社会人生活や仕事の業務ではなかったため、転職を決めて、大好きなサッカーの指導の仕事に3年勤めました。サッカーイベントの企画や運営等の仕事を経験して、その経験を活かして仕事ができたらと、総務省が募集している地域おこし協力隊に応募し、採用となりました。幼いころに見た地域おこし協力隊をテーマにしたドラマの影響もあって、挑戦しようと思い、夢が叶ったという感じです。

◎ 今後の事業展開について

アルバイト×合宿事業やAIカメラを利用した遠隔地からの競技指導についてなど、石



▲元サッカー日本代表大津さんと新見さんの2ショット！

卒業生の活躍を紹介する「あの人はいま」。今回は2020年度に福祉文化学科を卒業した新見弘基さんを紹介します。新見さんはEXPO 2025大阪・関西万博で、地域スポーツの魅力を引き出す映像活用の取り組みとその可能性をテーマにトークセッションを行いました。全国から注目される取り組みについても紹介いただきます！



垣島だからできるのではなく、全国に広がっていくことが目標です。ロールモデルとして人手不足の解決など地域課題の解決策として拡充していくといいなと考えています。

◎ 今後の夢について

いまは、スポーツをしている方々にしか関わっていない状況かと思うので、みんながあたりまえにスポーツを楽しめる社会を築きたいと思っています。また石垣からJリーガーを輩出するのが目標です。子どもたちが夢を描ける環境づくりを行いたいです。

10月には福井工業大学で講演も行いました。スポーツの可能性や地域課題にどのようにスポーツ振興が役立つかについてお話しました。いつか母校である沖縄大学でもお話する機会があると嬉しいです。

◎ 後輩たちにひとこと

やりたいことをやってほしいなと思います。いまできることを全力で取り組んでほしいです。大学時代はなんでも挑戦できる貴重な時間だと思います。

沖縄大学サッカー部監督
備瀬 知貴さんのコメント

彼は、何事にも熱意を持って積極的に行動する学生でした。県外出身のため、沖縄での生活や環境に戸惑いがあったと思いますが、学生生活での経験や学びを活かして、現在は、石垣島でスポーツコミッション事業の「AIカメラを活用したオンライン指導」を展開し、スポーツ庁から表彰されています。本学サッカー部OBとして、とても誇らしい存在であり、今後も、更なる活躍を期待しています。

年頭あいさつ

OKIDAI VISION 地域がキャンパス、地域のキャンパス
2028 沖縄大学は「知」と「人」の交流拠点となります学校法人沖縄大学
理事長

喜納 憲利

新年あけましておめでとうございます。平素より沖縄大学の教育・研究活動にご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

昨年4月1日に改正私立学校法が施行され、学校運営は大きな転換期を迎えています。改正法は、私立学校のガバナンスを一層強化・充実し優れた人材を社会に送り出すという大学の社会的責任を果たすための体制を構築することを目的としています。

私立大学は、法人が経営を、教学が教育を担うという役割分担から、しばしば二重構造のように見られがちです。しかし、本学が掲げる「地域共創・未来共創」の理念の下、優れた人材を社会に送り出すためには「より良い、より高い教育」の実現に向けて役職員一丸となって取り組むことが不可欠です。

現在、私立大学を取り巻く環境は大きく変化しています。18歳人口の減少や国立・公立大学志向の高まりによる学生募集の厳しさ、経済情勢の悪化に伴う外部資金獲得の難化により、財政収入の確保は一層困難となっています。一方で、物価上昇などに伴う諸経費の増加や人件費の上昇など、大学経営を取り巻く環境は非常に厳しい状況にあります。健全な大学運営のためには経営基盤の安定化が不可欠であり、将来を見据えた経営改善として、学納金の見直しや資産運用による財源多様化が求められます。また、質の高い教育を提供し「選ばれる大学」となるためには、カリキュラムの改革やキャンパス環境の整備、さらには大学の公立化を検討することも必要です。

こうした状況の中、改正私立学校法の下で本学の新しい運営体制が昨年6月にスタートしました。新私学法の趣旨を十分理解し、「大学を通して、学生・教職員・卒業生・地域・地元企業・沖縄を取り巻く多様な人々が交流・交差し、共鳴しながら共に学び成長し、沖縄の発展につなげていく」という本学のロゴマークに込められた想いを大切にしつつ、良い教学の実現を支える経営を目指してまいります。これらの課題解決に向け、全役職員一丸となって取り組んでいく決意です。

新しい年が、沖縄大学のすべての関係者にとって輝かしい一年になるよう心より祈念申し上げます。

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

世界を見渡せば、生成AIの飛躍的な進化が社会を一変させる一方で、各地で続く分断や紛争など、解決の糸口が見えない課題も山積しています。テクノロジーがどれほど進化しても、あるいは進化するからこそ、私たち人間に真に求められるのは、他者の痛みを想像する「共感力」と、正解のない問いに対して仲間と共に解を探る「対話の力」ではないでしょうか。

私はかつて、外科医として長年医療の現場に身を置いてまいりました。手術室という極限の場において何より重要だったのは、高度な技術もさることながら、互いを信頼し合う「チームの力」、そして患者さんの不安や痛みを受け止める「心の通った対話」でした。人を育てる教育の現場も同じです。マニュアル通りにはいきません。だからこそ、本学はデジタル化が進む現代にあっても、教職員と学生、そして地域の人々が生身で向き合う「距離の近さ」を大切にしています。

学生の皆さんにとって、教室での議論、サークル、ボランティアなどを通じた他者との関わり合いこそが、多様な価値観を受け入れる寛容さを育み、予測不能な未来を生き抜くための、しなやかで強靱な人間力の土台となります。

大学運営においては、長期計画「OKIDAI VISION 2028」も集大成の時期を迎えつつあり、理念である「地域共創・未来共創の大学へ」の実現に向けた歩みをさらに進めてまいります。今年は特に、沖縄という固有のフィールドを活かした実践的な学びや、一人ひとりの個性に寄り添ったキャリア支援など、小規模大学のメリットを最大限に活かしてまいります。外科医が患部だけでなく患者さんの人生全体を診るように、私たちも学生一人ひとりの将来と真摯に向き合い、安心して挑戦できるキャンパスを守り続けていく所存です。

学長として、医師としての経験で培った決断力とチームワークを活かし、教職員が一丸となって学生の成長を支える大学を、皆様と共に創り上げてまいります。本学に集う学生の皆さんの更なる飛躍と、関係者の皆様のご健勝、ご多幸を心より祈念いたします。

沖縄大学 学長
山代 寛